

博士論文執筆経験談

平成17年度3月修了生 小畑 千尋
(現 宮城教育大学准教授)

1. 博士論文『音痴』克服のための指導に関する実践的研究』の概要

「音痴」に関しては、広く一般に、音楽能力に先天的な欠陥があるかのごとく捉えられ、歌唱の発達途中段階であるという認識がなされていない。実際、「音痴」で悩む人に対する有効な指導法が確立しているとはいえない。これまでの研究では、音痴意識を考慮した対象者への指導、また対象者本人が自身の歌唱をどのくらい認知できているのかについての視点が欠けていたと考えられる。そこで本研究では、音痴コンプレックスを持っており、内的フィードバック（自分自身の歌唱の音高・音程の認知）ができない「音痴」の成人3名に対する指導実践事例の分析を通して、「音痴」克服にむけた指導において必要とされる歌唱技能面の指導・心理的援助を明らかにした。対象者が自身の歌唱を肯定的に捉えるようになる時期と内的フィードバックの向上がみられる時期は一致しており、内的フィードバックは、歌唱技能面だけでなく、音痴コンプレックス克服のためにも重要であることが明らかとなった。本論は全7章構成である。

2. 博士論文執筆 その1 ～研究の側面から～

- ・単位の取得：私は連合大学院（以下、「連合」と略する）に5年間在籍した。その間、連合を構成する4大学の先生方からご教授いただいた。博士課程3年までは、論文指導と4大学の講義を受講し、博士課程4、5年目は、論文指導が中心であった。
- ・研究発表：研究は、国内学会、国際シンポジウムなどで積極的に発表した。また、合同ゼミナールでは異なる領域の先生、学生の方から興味あるご指摘をいただき、大変勉強になった。口頭発表したものは、できるだけ論文としてまとめ、連合の論集、国内学会誌、また国際学会誌などに積極的に投稿した。
- ・科学研究費補助金の採択：博士課程5年目の年、「保育士養成課程における音痴克服にむけた指導法の開発（平成16・17年度科学研究費補助金 若手研究（B）課題番号：16730430）」を助成金を得て研究できることになった。事例研究、質問紙調査などを通して「音痴」克服のための指導の必要性を実感しているにもかかわらず、「音痴」をテーマに博士論文を書き上げることができるのかという不安が私には常にあった。科研費に採択されたことは、博士論文執筆のモチベーションを高めるきっかけとなった。

3. 博士論文執筆 その2 ～執筆生活～

- ・仕事との両立：連合入学からの3年間は、専門学校、大学の非常勤講師として講義を担当していた。更に連合4、5年目は、専任講師として勤務しており、仕事といかに両立するかは常に私の課題であった。
- ・執筆時間の確保：就職後は特に、研究のためのまとまった時間の確保は容易ではないことに気付いた。例えば、講義が始まる前の早朝、仕事から帰宅しての深夜、電車での移動時間など、短い時間でも研究モードに切り替えるように心がけた。しかしながら博士論文の最終的な執筆段階では、ある程度まとまった時間確保が必須であった。私の場合、職場の理解に恵まれ、博士論文提出直前に執筆のための期間をいただくことができた。
- ・自分には博士論文が書けないのではないか…という不安に打ち勝つ：博士論文を完成できると確信がもてたのは、論文提出の数日前だったと思う。それまでは、私にはまとめることができないのではないか、という不安と格闘しながら、執筆に取り組んだ。その時期の原動力は、自分の研究テーマ、つまり「音痴」克服に関する研究をどうしても博士論文としてまとめたいという思いであった。同時に、すでに博士論文を提出された先輩をはじめとする周囲からの励ましに大変支えられた。
- ・健康管理の重要性：連合在籍中の5年間、何度も体調を崩し、またケガをして半年以上研究が中断したこともあった。ごく当たり前のことかもしれないが、健康管理がいかに大切であるか痛感した。

4. 現在 ～博士課程修了後の主な研究～

現在、児童を対象にした音痴克服に関わる歌唱指導の研究を行っている。このテーマは、博士論文における今後の課題の一つである。博士論文を立脚点として、今後も研究を発展させてゆきたいと考えている。

付記：今回、専任教官の増田金吾先生からご依頼のお電話をいただいてからの約一ヶ月、改めて博士論文執筆中の5年間を振り返ることができました。そして、合同ゼミナールでは未熟な私の話を、学生の皆様だけでなく、ご指導いただいた先生方にも聞いていただきました。また、後半のワークショップでも多くの興味あるご質問をいただきました。このような貴重な機会をいただきましたことに深く感謝申し上げます。